



2013年8月7日放送

## 漢方を理解するための10処方

日本漢方振興会漢方三考塾 講師 高山 宏世

### (10) 八味地黄丸 (はちみじおうがん)

この処方のキーワードは「腎虚と補腎」。

弁証のキーワードは ①下半身の冷えと衰え、②尿利異常、③小腹不仁、です。

#### (どんな処方か?)

漢方では腎という臓は非常に広範で重要な役割を持っています。

先ず「腎ハ先天ノ本」といい、生命活動の基礎物質である腎精を内蔵しています。腎精は父母より直接稟けた先天の腎精と生後に体内で造られる後天の腎精とから構成されています。発育、成長、生殖、老化といった一切の生命現象は腎が両親より稟け継いだ先天の腎精に因って支配調節されています。その点から先天の腎精とはヒトの遺伝子のDNAに相当し、基本的に各人の体質や寿命などを規制する物質と考えられます。後天の腎精は先天の腎精の規制に従って腎が全身で働くために必要な腎陽や腎陰の材料になる物質です。飲食物の栄養分である水穀の精微から形成されて、髓に貯蔵保存されています。先天異常、発育障害、大病や不摂生・或は老化に因る全身の消耗や衰弱は皆腎精の不足即ち腎虚が関係する病です。

腎が人体の五臓六腑を温めその生理活動を推動する働きを腎陽と呼んでいます。腎陽は別名を「命門ノ火」とも称し、いわば生命力の根本です。一方人体の各臓腑に滋養と滋潤を与える基礎物質を腎陰或は「真水」と呼んでいます。人の陰陽は腎陽と腎陰を基本にし

て営まれているので腎陽及び腎陰が即ち全身諸臓腑の陰陽の根本と理解されています。腎陽も腎陰も腎精より生じたものです。腎陽と腎陰は常に平衡を保つことが大切です。腎陽が不足した状態を腎陽虚といい、ヒトは体温を失い全身の生理活動や生殖機能が働かなくなり各臓腑の機能が低下します。腎陰は腎陽の熱によって温められ全身を滋潤滋養するので腎陽が働かないと腎陰も働きません。逆に腎陽だけが盛んで腎陰が不足していると、必要な水分が欠乏して全身が焼灼され脱水乾燥して腎陰虚と呼ばれる煩熱の状態になります。腎陽と腎陰が平衡を保ち相合すると腎気が形成され、この腎気が腎の一切の生理機能を担います。腎気が正常に生じていればヒトは元気で活発に動くことができますが、腎気が不足したヒトは体温も低く全身の新陳代謝も虚衰して不活発になります。腎の陰陽が共に不足して腎気が働かない状態は、腎気の源である腎精そのものの不足である腎精虚が疑われます。**八味地黄丸**は腎気の不足を補う処方で、腎陽虚及び腎精虚の治療にも用いられます。

もう一つの腎の大切な役割は水液の代謝を正常に維持する機能です。これは現代医学の腎臓の働きと共通する部分です。体内の水液は胃に受納された後、脾の働きによって肺に運び上げられそこから全身に配布されます。配布された水液の一部は再利用され、他は膀胱に集められた後尿として体外に排泄されます。腎気はこの全過程を管理支配しています。従って尿利の異常や全身性の浮腫などは最終的には水飲代謝の異常に因るので皆腎の病に属すると考えられ、その根本的な治療は**八味地黄丸**が行います。

以上の他、腎には種々の働きがあります。骨を養い髓を生じるのも腎の大事な働きの一つです。ヒトは年を取ると骨が脆くなって疲労骨折などを起こし易くなりますが、漢方ではこれは取りも直さず年齢に因る腎の衰えの結果と考えます。また漢方でいう髓は現代医学の脳髓・脊髄或は骨髓などの神経系や造血機能とは異なり前に申しました様に腎精を貯蔵して置く所と考えています。ただこれと関連して「腎ハ作強ノ官、技巧出ズ」とも言われ、現代医学では神経系の機能とされている精密な作業能力も漢方では腎の役割の一つとされています。そこで老年者の疲労骨折や作業能力の低下は腎気の衰えと見て漢方では**八味地黄丸**を用いて補腎します。

また腎の働きの度合いは耳で測られ、毛髪の色艶に表現されます。年を取ると耳が遠くなって難聴になったり耳鳴りがするのは腎の虚衰の現れですし、また老人は体毛が薄く髪が抜けたり禿げたりするのも老化の証しです。これらは皆**八味地黄丸**を与える証候のひとつです。

**八味地黄丸**は腎気の不足に因る諸証を主治する処方ですが、その使用目標は、先ず腎気腎陽が不足しているので全身の冷えが顕著で元気がありません。腎は下焦に在るので下半身の故障、足腰の弱り・倦さ・痛み・浮腫などを必ず訴えます。次に多尿や乏尿、夜間に何回もトイレに起きる・排尿困難・尿の切れが悪く余滴が有るなど排尿の異常を伴います。老人男性に多い前立腺肥大症なども腎気不足の証です。

舌は淡白で滑苔がある。脈は沈で特に尺脈が弱い。

腹診をすると下腹部の中央が特に軟弱、或は下腹部の知覚が鈍麻した小腹不仁や下腹部の両腹直筋が異常に緊張している小腹拘急などといった腹証が見られるのが特徴的です。

### (八味地黄丸の原典)

八味地黄丸は『金匱要略』に、八味丸、八味腎気丸、腎気丸など異った処方名で出ていますが皆同じ処方です。

「崔氏八味丸ハ脚気上リテ小腹ニ入り不仁スルヲ治ス」(中風歴節病篇 5-19)

脚気は腎気不足の結果、水飲が全身に停滞するが特に下半身に顕著で下肢の浮腫や重倦さを生じたもので、下腹部に迄波及すると小腹不仁を呈します。

「虚勞、腰痛、少腹拘急シ小便利セザルハ八味腎気丸之ヲ主ル」(血痺虚勞篇 6-17)  
虚勞病が下焦に現れてて排尿障害を来たした証です。

「男子消渴、小便反テ多ク、飲ムコト一斗ヲ以テ小便一斗、腎気丸之ヲ主ル」(消渴病篇 13-3)

消渴は口渇して多飲多尿する病で水飲代謝の失調の一つです。

「婦人病ミテ、飲食故ノ如ク、煩熱シテ臥スヲ得ズ、反テ倚息スルハ何ゾヤ。師曰ク此レ転胞ト名ズク。溺スルヲ得ズ。胞系了戻スルヲ以テノ故ニ此ノ病ヲ致ス。タダ小便ヲ利スレバ則チ愈ユ。腎気丸之ヲ主ルニ宜シ」(婦人雜病篇 22-19)

胞とは膀胱です。転胞とは膀胱が捻転し尿道が折れ曲がって閉塞し排尿不能となって苦悶する病です。

これらの諸病は症状は異なるがその原因は皆腎気不足に因るもので共通していますから、八味地黄丸で腎気を補ってやれば治ります。つまり漢方で言う異病同治です。

### (八味地黄丸の処方構成)

名の通り、地黄・山薬・山茱萸・茯苓・沢瀉・牡丹皮・桂枝・附子の八つの薬味から構成されています。

君薬の地黄は蜂蜜で練って丸剤にする時は滋陰清熱・滋補腎精の乾地黄、湯液に作る時は温性で補腎益精の熟地黄を用います。臣薬の山薬と山茱萸で腎陰を養い固めます。佐薬の茯苓・沢瀉は水飲を廻らし利水、牡丹皮は下焦に起こる血の瘀滞を予防します。以上の6薬は腎陰を滋補する六味丸という処方になります。腎陽は腎陰の物質的基盤の上に生じるので、先ず腎陰を強化してその上で腎陽を補益する桂枝と附子を加えて八味丸という処方が出来上がります。処方全体では腎陰を強化し腎陽を活性化して腎気を十分生じさせ、全身の陽気を補い体温と動力を維持し、水飲代謝を始め腎の生理機能を賦活するのです。

### (八味地黄丸の臨床応用)

腎は先天の本、陰陽の根本です。健康を保持し寿命を永らえるには先ず命の基礎である

腎精を浪費せず大切にすることで、**八味地黄丸**は腎を損ない寿命を縮める恐れのある状況や老化の諸証には必ず用いられます。

類方との鑑別では**真武湯**証との違いが問題になります。

**真武湯**証は腎陽不足と水飲代謝だけが選択的に傷害されたものですが、**八味地黄丸**証は腎気が不足して、全身の陰陽の働きと、特に腎の生理作用が全部低下している状態です。